

フズリナを求めてカナダへ

佐 田 公 好*

要旨：カナダ政府 NRC の奨学資金で UBC（ブリティッシュ・コロンビア大学）に 1 年 6 ヶ月滞在し、カナダ・アメリカ合衆国西部コルディレラ地方の石炭—ペルム系のフズリナ群集を研究し、野外調査等で北米大自然の調査と日常生活などをまじえてここに記す。

はじめに

研究を通じて知り合った UBC（ブリティッシュ・コロンビア大学）の Wilbert R. Danner 教授の骨折りで、カナダ NRC（カナダ国立学術振興会）の資金が得られ、大学から招聘状を貰い、カナダへの長期出張が教授会で決定し、急に多忙になった。筆者は論文類、テキサスの石油会社、Humble Oil & Refining Company の研究所の Dr. J. W. Skinner に渡すフズリナのプレパラート（薄片）、石灰岩サンプルの両国税関用にタイプによるリストを作成し、妻敏子は二人分の衣服類、日常的嗜好品など、荷物の中身をタイプし書類を作成した。さらに、広島市宇品港近くの南海貿易会社に梱包と SHIPPING を依頼し、書類を同社に引き渡した。筆者のカナダでのフズリナ研究はこのようにしてはじまった。

カナダへのフライト

1967 年（昭和 42 年）9 月 19 日（火）日頃お世話になった恩師今村外治名誉教授、豊田英義教授、多井義郎教授、小島丈児教授、岩佐 正教授にご挨拶を済ませる。小島先生がハワイにでも寄って給油するのかね、それとも空中給油かなあー？といわれる。DC 8 はノンストップのようですと答えたことを思い出す。廊下で濡木輝一先輩に会いご挨拶する。

9 月 18 日（月）、九州大学の鳥山隆三教授と勘米良亀齡助教授（当時）にこれまでのご指導を謝するため空路 YS11 で日帰りする。鳥山教授は英会話に慣れるためアメリカの貨客船で行きなさい、といってくださいるも既に航空券の手筈を済ませていたのでそれはかなわなかった。先生はイリノイ州立地質調査所の故 M.L.Thompson 博士のもとへ留学されていたので、その時の経験から仰って下さったようだ。勘米良助教授は謹厳で誠実な人柄の方、一つで良いから論文を書いて無事に帰国しなさい、と餞の言葉をいただいた。先生は英国エディンバラ大学への留学経験をお持ちであった。エディンバラへ留学される時、夜 12 時頃であったが今村外治先生と広島駅の僅かな停車時間に列車の昇降口で会い、お見送りしたことがある。自分もいつの日にか留学したいものと思った。

18 日の夜、通産省地質調査所広島支所の関係者が本通りの酔いで送別会を開く。9 月 21 日、

* 広島文化学園大学（旧呉大学）社会情報学部・大学院研究科、元教授、客員教授

フズリナを求めてカナダへ

第一講座（地史学）今村外治名誉教授と関係者の壮行会をニッセイ会館で催していただく。9月23日（土）、大学を留守にするので、今村外治名誉教授のご自宅に敏子と最後のご挨拶に伺った。これまでに先生は留守中ご迷惑をお掛けする大学関係者に失礼のないようにと、いろいろなことを電話で細やかに教えて頂いた。そしてカナダからの帰途にできたらヨーロッパを回って来なさいとあって頂く。妻敏子はこのことを脳裡に留めていたらしい。後でわかることになる。先生ご夫妻のこれまでのご教導にお礼を申し上げて拝辞した。9月24日（日）、研究室と暫しの別れ。鍵をかけるとき暫くの間 *Auf Wiedersehen!* と呟いたことを今もよく覚えている。いよいよ明日は広島を離れる日。

Auf Wiedersehen! 研究室と暫しの別れ

9月25日（月）、広島駅のホームに着いて見ると大勢の方々が見送りに来てくださっていて驚いた。子供時代によく見た出征兵士の見送りのようであった。私は行った限にはなりませんよ、必ず帰ってきますよ、と心の中で呟いた。同時にお忙しい時間を割いてのお見送りに感謝した。広島発10:08分、第1しおかぜの到着を待つ。当時、岡山まで開通していた新幹線に乗り換えの予定。米山先生からは列車の昇降口で花束を頂いた。敏子の長姉、大田澄子が東京まで付き添ってくれた。初めて乗ったグリーン車（広島～東京間）は彼女のオゴリであった。

9月26日（火）、山門高校の親友、伊原幹雄君と総理府行政管理庁付近の喫茶店で短時間会い雑談する。出張期間は何年かと聞く。一年半といったら国家公務員は二年まで許されているから後で延ばして貰えという。出発前に部長に話したら大学では一年半が限度だ、二年というなら責任は持てない、といわれたと話す折角の良いチャンスに惜しいなあー、と彼はいった。出発前に郷里へ帰り挨拶できなかったのが教師をしている長兄の成生兄が上京し、勤めを果たして無事に帰国するようにとの父母の言葉を伝えてくれた。東京駅二階の古めかしいレストランにて二人で鮎料理の昼食をとる。当分このような魚は食べられないだろうと思った。明日はいよいよバンクーバーへのフライト。この時これまで八面六臂の多忙であったことがすうーと消えたように思えた。

9月27日（水）、羽田空港発19時。空港には敏子の姉大田澄子、次姉の小木曾夫婦と甥の大助、広島大学文学部の敏子の親友、寺尾安子さんと二人の令娘、斉藤明美さんが見送ってくれた。

およそ8時間のフライトの後、現地時間の26日10時頃バンクーバーの空港に着くと、初めて会う *W. R. Danner* 教授が出迎えてくれた。身長の高い、見るからに端然とした紳士と見受けられ安堵する。筆者が大型のスーツケースで重くて運び悪くしていると、横合いからひょいと掴んで軽やかに運んでくれた。自宅へ案内し、アパートが見つかるまで自宅に泊まれとあってくれたが固辞し、ダウンタウンのホテルを頼み、ブラックストーンホテルまで送って貰った。緊張はしているものの、時差の関係で矢鱈と眠かったことを覚えている。

ホテルで現地時間の午後11時頃目がさめた。空腹を感じる。ホテルの窓から外を見ると下

で矢印のネオンサインがまだ点滅している。妻が何か買ってきなさいといったので店へ行く。パイを見つけたので値段を日本円に換算してみると頗る高い。まだ 1 ドルが 360 円の時である。筆者の日本からの持ち出し金額はカナダで給与を受ける関係で僅か 200 ドル、妻が 500 ドル、併せて 700 ドルと日本政府によって規制され、二人の旅券には持ち出し金額が記載されていた。この先は当分これだけで総てをやっていかなければならないと思うと急に買いたくなくなり、ホテルへ帰ってしまった。呆れた妻がそれではと彼女が食わずに鞆に忍ばせていた機内食用のクッキーと羽田から持ってきたクッキーを出す。これで明日朝まで我慢しなさいという。女性は総てにおいて行き届いて、男性よりも高等にできているらしい。

UBC (ブリティッシュ・コロンビア大学) へ出勤

9 月 29 日 (金)、ホテルから大学へ出勤する。Danner 教授がコーヒータイムの部屋で地質部長の W. H. Mathews 教授、McTaggart 教授、J. V. Ross 準教授、J. W. Murry 助教授、そのほか居合わせた教室の先生方に紹介される。理学部長室へ行き学部長の Okulitch 教授 (古生物担当) にも紹介する。その後、キャンパス内の Bank of Montreal へ案内してくれて銀行口座を開設する。すると間もなく広島からバンクーバーまでの妻敏子と二人分の旅費 800 ドル余を支給された。日本の大学より随分と速い支給である。この後に給与 500 ドル (所得税なし) が支給されたのでバンクーバー到着日の夜の空腹は思っても忌々しい。

土曜日にアパート探しのため空室 (Vacancy) のサインを見て回る。雨の中で足を棒にして探したが気に入ったものがなかなかない。翌日 The Vancouver Sun の新聞広告を見ていた敏子が Kitsilano ビーチ近くのものを見つける。電話でアポをとりそこに行って直ぐに決めた。1 LDK と 1 Bed Room だがリビングとベッドルームがとても広い。リビングの窓越しに English Bay を望む部屋である。浜辺を二人でよく散歩した。バンクーバー市の全面みどりの公園で手入れもよくなされている。初雪の時ビーチに出て積雪に足跡を残して歩いたことを今も忘れない。夏は海水浴になり大勢の男女がやって来てビーチは華やぐ。

10 月 2 日 (月) 大学へ出勤する。研究室は広島大学の研究室の半分もないくらいの面積である。電話機やスチーム暖房などの設備はあり、これで仕事ができる。今日から仕事を始めたいと Danner 教授に申し出ると別棟の彼の標本室に案内してくれた。夥しい薄片 (プレパラート) と石灰岩標本を格納している。この部分は合衆国オレゴン州のもの、ワシントン州のもの、カナダ国 ブリティッシュ・コロンビアの Kamloops のもの、Chilliwack のものと淡々と説明を加えていく。だが、研究の指示とか方針は何も言わない。後はいっさい任せるとか、自分の興味あるものからやれば良いというのであろうか。鷹揚にして、悠揚迫らぬ人柄である。どれから始めるのかと筆者が聞くと、As you like it という。背丈も高いが気持ちも寛容のようだ。では筆者が好きなように始めるよ、といったら、OK という。これで筆者の仕事は始まった。ただ Danner 教授が主宰し、J. V. Ross 準教授、J.W. Murray 助教授、R.E. Garrison 助教授が参加する大学院の地史学系セミナーには日本やアジアの地質も入るので参加してくれといわれた。金曜日の 10:30—12:30。この他にはこれといって義務はないの

フズリナを求めてカナダへ

で研究に打ち込むことができた。

暗室の様子を見たいというと 2 階に上がった。スペースは充分の広さで、使いがってもよさそうであるが、水周りの設備が少し旧式。ドアの外側に使用の予定表があり前もって予約を書き込むようになっている。これは少々面倒くさいなと思った。

教室の図書室に案内される。女性の若い司書が一人いる。雑誌を見ると筆者の専門分野のものは皆あるようで安心した。日本の古生物学会誌も来ていた。ここにはないものは大学の付属図書館へ行ったら総て見られると **Danner** 教授が教えてくれた。さらに日本語の書籍と雑誌は図書館内にあるアジア研究所へ行けば沢山の蔵書があると親切に教えてくれた。後で行ってみたら、全国紙の朝日新聞、毎日新聞、読売新聞などが毎日空輸されている。雑誌は中央公論、文芸春秋などがあつた。昼休みは毎日のように新聞を見に行き、金曜日は雑誌も借り出して帰った。さらに、奥の方では今は故人となられた加藤周一氏がフランス語で大学院の女子学生にセミナーをやっておられた。

加藤周一さんは当時この大学で教授を務めておられた。海外だからこのような光景を身近に見ることができたのであろう。バンクーバーで知り合った二世の **Victor Koji Ujimoto** という大学院生（現在カナダ東部オンタリオの大学教授を定年退職）の担当教授でもあつた。彼の結婚式にも教会へ来ておられたが、披露宴ではいつの間にか行くえ不明。あれだけの有名人ともなれば電話帳にもその名はない。まさに大隠は市に隠れるである。

閑話休題、地質学教室の薄片作製室は別棟にあつた。テクニシャンが数名いる。機器を見て回る。充分な設備である。このテクニシャンたちは実験用顕微鏡とその周辺機器の一切を管理しているとのことであつた。不足する物があれば彼らに言いなさいといわれた。

顕微鏡は **Bausch & Lomb** の生物顕微鏡と **Nikon** の偏光顕微鏡が研究室に準備されていた。研究の手始めに標本室の全部の薄片を検鏡することにした。

UBC (ブリティッシュ・コロンビア大学)での予察的研究

オレゴン州のフズリナ群集

1967 年 10 月 10 日。アメリカ西部コルディレラ山脈の西側を南から北上することにして、標本質から黒っぽい泥質の石灰岩の薄片を研究室へ運ぶ。このようなものは日本の下部石炭系で見た経験があり、興味津々。検鏡を進めていると殻の輪郭のはっきりした保存の良い *Eostaffella* がいる。まさに天佑というべきか。これはと思っていると今度は何と *Hexapyllia* もくっきりと居場所を確保している。夢ではないかと思い、思わず椅子から立ち上がったことを思い出す。アメリカ西部で *Eostaffella* は初めての発見、さらに *Hexaphyllia* は北米大陸からこれまでに報告された例はない。何たる僥倖か。これはきっと論文にできると確信した。ただ論文にする為にはさらに薄片が必要である。大きな発見でアメリカの地質学会にも貢献できるであろうし、筆者の北米西部の研究も幸先が良いと独り言をいった。嬉しい限り。なにか富鉱帯に突き当たったような手応えがあつた。

ブリティシュ・コロンビア州とワシントン州のフズリナ

ブリティシュ・コロンビアの群集はワシントン州の Orcas 島、ブリティシュ・コロムビアの内陸などに拡がり、甚だ広域であることがわかった。主として *Millerella* と *Eostaffella* からなる群集であるようだ。ただ、Kamloops 近くの群集でオレゴン州に続き *Hexaphyllia* のみで存在する群集を発見する。どちらももう少し薄片が必要と判断した。

Chilliwack の群集

バンクーバーから程近い Chilliwack の群集は *Parafusulina* や *Pseudofusulinella* などかなり、顕微鏡写真装置が UBC の地質学教室にないため、Danner 教授の同意を得て広島大学の筆者の研究室に持ち帰らなければ仕事はできない。広島大学の教室では筆者と共栄社という出入りの業者である製作所と共同で作った部品を組み立てた手作りの顕微鏡撮影装置がある。これでないとなこのような超マクロなものは撮れないからである。Danner 教授の許可と税関が後で問題になるであろうと考えた。

Kamloops の *Pseudoschwagerina* 群集

Kamloops の資料を見ればオリエンテーションの良くない大型の *Pseudoschwagerina* と見做されるフズリナが認められた。これは徹底した薄片を作らなければ論文にはできないし、また広島大学の顕微鏡撮影装置でなければ研究はできないと思った。

観察結果を Danner 教授へ報告

Danner 教授のコレクションを顕鏡して、だいたい以上の様な見当をつけた。これらのことを Danner 教授に彼の研究室で報告する。彼は大いに喜び、好きなように研究を進めてくれといわれたので筆者も安心した。オレゴン中央部のものとブリティシュ・コロンビアとワシントン州のものを UBC の地質学教室に滞在している間に仕上げたいと考えた。オレゴン中央部のサンプルは充分でないので、現地で調査の上サンプルを採集しなければならないと Danner 教授に話す。彼曰く、講義期間中は学会を除いて教室を留守にできないのでワシントン州 Richmond の研究所にいる Dr. Merlynd Nestell に頼もうという。筆者の希望は来年(1968)が良いとも付け加える。

Chilliwack の *Parafusulina* 群集と Kamloops の *Pseudoschwagerina* 群集は広島大学の教室で完成させたいといったら、OK という。話はトントン拍子に決まり嬉しかった。それにしても Danner 教授は何と寛闊な心の持ち主であろうかと感心せざるを得なかった。検鏡をざっと終えるのに凡そ 7 日間を要した。その折、驚愕するような発見もあった。この研究の幸先は良いと確信した。

ブリティシュ・コロンビア大学での本格的な研究

ブリティシュ・コロンビア州とワシントン州のフズリナ群集についての室内研究

フズリナを求めてカナダへ

1967 年 11 月 24 日。研究の方針が定まったので一路邁進するのみである。オリエンテーションの完全なものから来る日も来る日も顕微鏡撮影に向き合う。イギリスの微粒子フィルム(ADOX)を使用するので現像すればコントラストがあまり良くない。日本では富士フィルムの微粒子フィルム、ミニコピーを愛用していたのでコントラストに問題はなかった。どうすれば良いかなと思案した。Nikon の光源を Max.にし、絞りを出きるだけ Min.にし、シャッターを数えながらデータをとって見る。理論上はこれで良いはずである。暗室の中の度量衡も全く異なっている。重さはオンスに、容積はガロンに、温度計は摂氏でなく華氏へとそれぞれ変り、薬品の調合と調整に慣れる必要があった。顕微鏡写真を済ませた上で実物と写真との identification, 個体の測定、生物学的諸要素の比較検討、文献との照合、記載と次々に煩瑣な仕事を進めて行かねばならない。

暗室と研究室を行ったり来たりしていると外のことに注意を払わなくなる。2 階と 1 階の階段の踊り場に大きな全身を写す鏡が壁に埋め込んである。そこに 2 階から降りてくる東洋人らしき者が目に映る。誰かと思ったら自分であった。呵々大笑ものだと思った。白人たちの中に暮らしていると、いつの間にか自分も同類だと思って暮らしている自分を知り、おかしかった。

出勤時に見る UBC の広大なキャンパス内にカナディアン・メープルの並木があり、団扇のように大きな葉っぱが 10 月初旬になると黄葉する。スタンレイ公園も、街の街路樹も一斉に黄葉してとても美しい。冬がやって来る前の自然の移ろいの一時である。

後日談になるが九州大学の故松本達郎教授と東京虎ノ門会館で昼食を一緒にした時、佐田さんがいた UBC へ行ったよ。キャンパスがとても美しく落ち着いた大学ですねといわれた。先生は英国の大英博物館でアンモナイトの研究をされた世界でも屈指の専門家である。

Dr. Charles (Chuck) A. と Dr. June P. Ross 夫妻の来訪

1967 年 12 月 7 日。米国の Bellingham の Western Washington University (バンクーバーの南約 80 km.) の Dr. Charles (Chuck) と Dr. June P. Ross 夫妻の来訪を受ける。地質学教室前の道路で出会う。研究室まで 3 人で歩く。Ross 夫妻は Yale 大学で教鞭をとった有名な Dumber 教授の教え子である。彼の祖父が、気候が良いからといってバンクーバーに在住しているので見舞いに来たついでに挨拶に立ち寄ったという。研究室であれこれ雑談をした後、また来るからといって Bellingham へ帰る。冬から早春にかけてはカナダの人々は屋内生活が主になり、親しい友人を家族ぐるみでディナーに招待しては親交を深める社交のシーズンとなる。スペインのギターリスト、Segovia が来ることを敏子が新聞で知り、クイーンエリザベス劇場へ行く(1968-1-6)。当時、敏子は広島の家でギターを弾いて楽しんでた。アメリカのバレエ団も見たいといってクイーンエリザベス劇場(3-24)で鑑賞する。

3 月下旬になると気候も随分良くなる。大学院セミナーの一環として野外巡検を San Juan 諸島の Orcas 島で行う。この島は筆者の研究対象でもある。石炭系から白亜系までの地層を巡検する。3 日間の日程であった。

車で移動中に土筆らしきものを見つけた。目を疑ったが車を止めてもらい、良く見れば紛れもない土筆である。茎の長さが 30 cm にも及ぶ。このような土筆を見たのは初めてであった。北米では土筆を食する文化がないようである。広い範囲で生えている。近年、故阿川弘之氏の“食味風々録”（新潮文庫、2004 年出版）を何気なく読んでいたら、このことが書いてある。カナダとアメリカの国境近くで見つけたようだ。驚きであった。

Dr. Nestell の来訪とブリティッシュ・コロンビア州とワシントン州のフズリナ測定終了

1968 年 1 月 4 日（木）～5 日（金）、Richland から Dr. Merlynd K. Nestell とその家族が来訪。4 日夜に Danner 教授と Nestell とその家族を夕食に招待する。すき焼きでもてなす。その後で日本の石灰岩地帯と風景などをスライドで紹介する。

1 月 15 日（月）ブリティッシュ・コロンビアとワシントン州のフズリナ測定を終える。タイプライターは広島大学の大きいスタンダードと自宅ではポータブル Olivetti を使用していたがポータブルを持参しなかったから、夕食後に敏子と 10th St. の店を訪れ買い求めた。セミナーに参加する以外は研究に打ち込め、広島大学にいた時のように教育と雑用がないのでプラン通りに研究は進み、別世界の感があった。

5 月～8 月のスケジュール

5 月は AAPG（アメリカ石油地質学会）、カルガリー大学および GSC（カナダ地質調査所）訪問、オレゴン中央部の地質調査実施、6 月初旬はブリティッシュ・コロンビアの Kamloops 地方の地質調査を Ted Danner（Ted は Danner の愛称）教授が計画している。8 月下旬にはまた、カナディアン ロッキー氷河の巡検を敏子と計画している。その間、広島大学の米山穰教授（植物学）と京都大学名誉教授（地質学）のバンクーバー訪問を迎えなければならない。

AAPG に出席して

AAPG では数名のフズリナ研究者が発表する。この学会中にフズリナ研究者の集まりが計画されていた。現役の研究者が約 30 名集まった。議題はフズリナの研究をこのさき如何に進めて行くかということであった。いろいろな意見が熱心に論じられた。

この学会で感心したことがある。地質学で使えるコンピュータとソフトの展示には驚いた。もう一つは M. Kay 教授が若い大学院生にロビーで囲まれ、地向斜の質問を受けて気さくに説明している。Kay 教授は北米大陸の地質学的成長を地向斜理論で説明した人で世界的に有名な教授である。47 年も前のことで現在は付加体の理論で古くなってしまったが。日本の学者と随分違うなと思った次第である。学会の空き時間を利用して旧知の Dr. Raymond C. Douglass (USGS) と Oklahoma City の動物園を見てまわり休息を取った。

学会終了後に Dr. John W. Skinner 夫妻とテキサスの Midland へ飛び、彼の石油会社の研究室と実験室を見せてもらい、美濃赤坂の未解決の資料を二人で検鏡した。疑問に思っていた物が *Paradoxiella* であることが判明した。Skinner 氏はテキサス西部から *Paradoxiella*

フズリナを求めてカナダへ

*pratti*を報告し、この属の *type species* とした人であり、日本列島からも出現したということで大変喜んでくれた。これは後で二人の共著論文で公表した。大変嬉しかった。Skinnerさんは日本が大好きな人で日本語を独学で学び手紙の末尾には必ず日本語で一言書いてきた。

後日談になるが Skinner 夫妻が観光のため日本へ来ることになり、もちろん広島市や広島大学もプランに入っていた。当時の広島グランドホテルで夫妻に再会した。夫妻は定年後の通訳付きの旅行である。大学はもとより国家公務員住宅のわが家にも夕食にご招待した。

デンバーの USGS（合衆国地質調査所）を訪問

帰路コロラド州 Denver の USGS を訪問。Dr. Donald A. Myers の研究室で暫く話し、ご自宅に招かれた。夕食後に明日の McCoy 行きのため地下室で準備する。日本の長持のように大きい冷蔵庫の中から Kodak フィルムを取り出す。Dr. Sada は何本要るかというので筆者は持っているから不要という。蓋を大きく開けて大抵の食料はあるよといって見せてくれた。筆者どもと比較にならない生活だと思った。彼と彼の助手と筆者 3 名で American Rocky の McCoy ヘサンプリングに行く。道路が良いので相当のスピードで走る。高度が増していくに従って 4 月 29 日というのに肌寒さを覚えるようになる。McCoy に到着すると、Myers 夫人が用意してくれた昼食のサンドウィッチを摂る。車のトランクには蛇口付きの大きなタンクを載せていて喉の渇きを覚えることはない。まわりには風化の進んだ石灰岩と頁岩のみで、頁岩をショベルで掘り進み、フズリナが個体で認識できる。このような状態を日本列島で見たことがないので驚いた。この頁岩を布袋に入れて持ち帰り、研究所でミルにかけて砕き、水洗し、乾燥して個体を取り出し、薄片作製に供する。採取したものは主として石炭紀の *Triticites* であった。

30 日に同研究所の Dr. Betty Skipp に会い石炭紀の小型有孔虫研究について話す。アメリカではその当時、Zeller 夫妻や Skipp 氏のような人が代表的な研究者であった。日本でも研究者は少なかった。話が進むなかで彼女曰く某氏の論文は“unreliable”であるともいう。5 月 1 日（水）、研究所を離れる時 Myers 氏が黒光りのする Cambrian? の三葉虫（Trilobite）を贈ってくれた。よく見れば彼の研究室の机の上にあった物ではないか。大変恐縮し、礼をいっていただいた。広島大学在職中は大切に学生の実験や講義に供していた。京都の地科学社より購入したものより一回り大きくてほぼ完全なものであった。この標本は、地科学社より納入時に納められたリストにもない筈だ。標本箱の上下の境目を灰色のテープで封印した状態で使用していた。広島大学を停年退職する時に多忙で管理不行届きのため行方不明になってしまい Myers 氏に今も申し訳なく思っている。姿を現すことを祈り探し続けている。

カルガリー大学と GSC（カナダ国立地質調査所）訪問

5 月 8 日（木）、フズリナ研究者の Dr. McGugan と Dr. R. Thorsteinsen に会うためアルバータ州のカルガリー大学と GSC（カナダ国立地質調査所）を訪問した。空港に Dr. McGugan が迎に出てくれていた。Canadian Rocky の東側で大陸氷河の堆石（moraine）を含む広大な

平原が地平線まで続く。彼の研究室や大学の諸設備を見せてくれた。Calgary はオイルシェールや石炭が発見されて急激に発展した都邑である。大学も新しい設備を持っていた。Dr. R. Thorsteinsen の研究所もこのような特殊事情から Ottawa の研究所から分離してできた様である。彼のフズリナ研究を見せてもらう。まだプレートの作成中だが意見を聞かせてくれとなかなかオープンな研究態度である。この論文はきっと凄い論文になるだろうと思った。夜は coral が専門の Dr. E. W. Bamber の家に二人が招待された。翌日は Dr. McGugan が車で Banff へ案内してくれた。濃い緑に包まれた国立公園地帯に氷河や氷河湖がひろがっている。また道路沿いに Devonian から Mississippian までの石灰岩が一望できる Mt. Cascade。ケーブルで到達した山頂から見える対面の褶曲構造はまるで絵に描いた教科書のようなものである。Mississippian の Mt. Rundle もケスタ地形が美しい。Canadian Rocky に後ろ髪をひかれる思いで 11 日にカルガリーに別れをつげた。

米国オレゴン州 Suplee の地質調査

5 月 17 日から 22 日までワシントン州の Richland へ行く。そこからオレゴン州のほぼ中央部に当たる Suplee へ出発予定。Richland はコロンビア溶岩（玄武岩）台地上に造られた街である。Dr. Nestell がわが家に泊まれというので 2 泊し、敏子をおいて彼と二人でオレゴンへ出発する。目的地までなかなか遠い。行けども行けども麦秋の麦畑が続く。道路は良いが行き交う車はたまにしかない。広大な一区画の中にトラクターで耕した麦畑が円を描いたように丸く広がっていて四隅は空いたままになっている。日本式の狭い区画の田圃ならば何枚分もあるであろう。このような国と緻密に計算することもなく日本の軍部は愚かにも戦を仕掛けたものだとつくづく思った。アメリカの中西部へ行けばこの思いはさらに強くなる。

さて、オレゴン州 Crook County の Suplee に着くと Coffee Creek Formation の黒っぽい泥質の石灰岩の露頭にたどり着く。Merriam (1942) が下部石炭紀 (Mississippian) の coral を報告した由緒ある露頭である。このような歴史ある露頭からかなりの量の研究用サンプルを採取することができて暫し愉悦にふける。広大な土地は蕭条落莫として人気なし。調査時には、オレゴンの街へ出た牧場主の空き家に宿泊するといって移動した。Dr. Nestell が前もって連絡していたようである。その牧場に着くと必要なものは残してあった。寝室にはベッドも置いてあった。持参した食料で夕食をすませる。ところが夕刻になったら 3～4 人のカウボーイが帰ってきた。牧場主一家は街へ出たが、その空き家は雇い人の彼らが使用しているようであった。連絡が入っていたのであろう。突然の闖入者である我らを彼らは迎え入れてくれる。言葉はスラングが多くて一寸判りにくいものである。相棒の Nestell に任せた。いっさいの仕事を終え Richland の彼の家に帰り、一泊して 22 日夕刻、バンクーバーに帰り着く。

5 月末に Ted Danner の鰯料理の招待を受ける。オレゴンの Coffee Creek Formation の調査結果について話す。また、これから予定しているブリティッシュ・コロンビア内陸の地質などの話を聞き、大いに夢を膨らませた楽しい一時であった。

フズリナを求めてカナダへ

ブリティッシュ・コロンビア Kamloops の野外調査

1968 年 6 月 10 日～15 日の間、内陸の Kamloops 方面の調査に従事する。Ted Danner, Merlynd Nestell, 学生の Paul Garvin、それに筆者の 4 名で行く。まずは Cash Creek 西方、Lillooet 近くの Marble Limestone を巡検し、さらに砕屑岩類の巡検をする。夕方、疲れているのに調査に熱中してなかなか引き揚げない。Discovery at Evening Six O'clock といって岩石をルーペで調べ打ち止めにしない。10 日夜は Cash Creek 方面の調査で Meadow Lake で野営する。静寂のなかに森林を越えて吹く風の音とコヨーテの遠吠えが聞こえる。翌朝、山頂から望めば氷河湖が遙か遠くまで連なり、大河のように見える。一つ一つの氷河湖の周りは塩分の析出で白く縁取られていて、森林地帯を蛇行しながら続いている。はじめて見る光景で感動した。二日目の夜はモーターに宿泊する。浴槽での石鹸の泡立ち頗る悪し。夜、野外映画館で車の中から観覧する。これもまたはじめての経験である。

Kamloops の調査では Mt. Harper を目指して歩く。白樺林を通り抜けて先頭の Ted Danner が突然屈みこむ。見れば真紅の小さい花が咲いている。彼曰く、インディアン・ペイント・ブラシの花という。その花に小さい昆虫がいるのを捕まえて早く大きくなれよ、といって放してやる。優しい心の一端を垣間見た感じである。背丈の低い野生の向日葵も生えていた。

Mt. Harper と Mt. McGregor 付近で *Pseudoschwagerina* 群集を発見する。後に論文を上梓することになる。Kamloops ではまた coral を沢山採取し、帰国後、広島大学で薄片にして九州大学名誉教授鳥山隆三先生の弟子で福岡大学に勤務する杵山哲夫助教授（当時）に論文になるよう協力を求めた。筆者がブリティッシュ・コロンビア大学の研究室で発見した Rayleigh の *Hexaphyllia* も含めて Sugiyama, Sada and Danner (1999) で論文になり喜びを分かちあえた。思い出深い野外調査であった。

バンクーバーの Fjord と米山 穰先生および松下 進先生の当地訪問

1968 年 7 月 7 日（日）敏子と North Vancouver の Indian Arm にボートで遊ぶ。カナダの入り江は氷河によってできた峡湾（Fjord）で急激に深くなり、あまり沖に出るのは恐ろしい。早々に岸边に戻る。数名は乗れる金属製のボート、一人で漕ぐには重量感を覚え疲れた。Fjord が発達するのはブリティッシュ・コロンビア、チリ、ノルウェイの海岸が世界的に有名である。このような入り江には潜水艦基地があり潜水艦は潜行したまま出入りする程の水深がある。

19 日にはアラスカからランドクルザーで植生を調べながら米山穰教授がカリフォルニア大学の Dr. Phaff や Dr. Miller と一緒にバンクーバーに着かれ、昼をわが家でおもてなしする。Stanley 公園や Queen Elizabeth 公園を案内し、夜は米山先生が日本食のレストランに招待される。Phaff さんと Miller さんが白米のご飯に醤油をかけて食べられるので呆気にとられて見ていた。故阿川弘之氏の“食味風々録”で判ったことだがアメリカではミルクマン、ポストマン、キッコウマンといわれるほど醤油は普及していたようである。26 日には京都大学の松下 進名誉教授（地質学）がバンクーバーに到着された。住友鉱山バンクーバー支店（当

時の会社名)の平田洋一さん(京大地質の出身)宅に二泊されて東部へ出発される。二日目の夜、筆者も招待されていたのでご自宅を訪問する。京大の研究室で何度かお会いしたことがある。夕食後、筆者が Canadian Rocky のスライドで責めを果たす。Mt. Cascade の Devonian から Mississippian の石灰岩層を説明していたら、両者の関係は整合か不整合か、と聞かれた。私は直に調査していないので、Dr. McGugan に教えられたことの受け売りでそれは判りません、と返事した。McGugan は整合とも不整合とも説明しなかった。

カナディアンロッキーの夏

1968年8月25日(日)から30日(金)まで Canadian Rocky の Jasper~Banff 方面を敏子と旅する。カナダ国有鉄道のバス付きの二人一室の個室が取れたので安心であった。食堂車と展望車もついている。夜半に Kamloops を通過。もう二度と来ることはないなと思えば一抹の寂しさを禁じ得ない。暁闇に列車は Canadian Rocky の麓にさしかかる。喘ぐように徐行しながら North Thompson River (Kamloops で分岐する所謂 North Thompson River とは別の支流)沿いに山間を北東に進み、Tete Jaune Chache から Fraser River (所謂 Fraser River とは異なる)に沿って北東の Jasper に向かう。眠いが剋目して朝の車窓に目を凝らす。森林地帯を低速で走るところは何か寂寥とした感じを覚える。Jasper が近くなってくると日本で見たことのない風景となる。森林限界がいかにもはっきりしていて、限界以上では先カンブリア紀の変成岩が剥きだしになっていて、標高の高い山岳地帯を万古不易に形成しているのが望まれる。

Jasper のホテルで調査着に着替えてコロンビア氷原 (Columbia Ice Field) の有名なアサバスカ (Athabasca) 氷河 (glacier) へ向かう。アサバスカ氷河では先ず見事な U 字谷が此方に向いて形成されていて、自然の営みに驚嘆する。U 字谷の両側面には側堆石 (lateral moraine)が続く。氷河に近づくとその先端は年々後退していて、底の岩盤を剥ぎ取る破碎作用(plucking)と研磨作用 (polishing) の凄まじさが、累々と広がる低堆石と氷河擦痕(glacial striae)により良く判る。U 字谷の両側には懸かり谷氷河(hanging glacier)も見られるし、山頂部には圈谷 (Kar, cirque)が形成されている。アサバスカ氷河のように高度の高い山では天候が刻々と変るので、はっきりした全体像を見ることはなかなか難しい。敏子が調査中にこれは何?と声を掛けてきた。見ればカンブリア タイプの黒っぽい頁岩のようで化石ようのものが含まれている。Ted Danner が口癖のようにいつていた Evening at Six O'clock だ!またカナディアンロッキーには氷食尖峰 (horn)や針状峰 (aiguile)がよく発達し、アサバスカよりバンフ (Banff) にかけては容易に観察される。全く教科書のような。夜はアサバスカ ホテルに一泊する。8 月下旬というのにもうスチームが入っていた。翌朝、抜けるような蒼穹の空、この時間に昨日から待ちに待ったカールの写真を撮ることができた。アサバスカ氷河の低堆石のうち手ごろな黒色頁岩 (カンブリア系の頁岩?) と氷河擦痕(glacial striae)の見えるドロマイト質石灰岩を恩師今村外治先生への土産としバンクーバーへ持ち帰った。先生は広島大学を停年退官後に鈴峯女子短大にご勤務であった。バンフでは先カンブリア系の石英質

フズリナを求めてカナダへ

砂岩 (Quartzite) の調査をした。ハンマーで層理面を割れば堅牢だがグラニュー糖でできているような純白で粒子の細かい表面が見える。誠に美しい。教材用に持ち帰った。Banff に一泊し、ホテルでニジマス (rainbow trout) のバター焼きを食する。この付近に多い湖水で獲れたもので美味であった。

29 日午後、グレイハウンドバスに乗り込む。乗り心地はとても良く、ドライバーは大きなバスストップで時々交代しながら夜を徹して走る。カナダ大陸横断ハイウェイ下の漆黒の谷間に集落の灯火が幻想的で哀愁を誘う。アメリカ民謡の“谷間の灯火”(ライオン、ハルト&バガボンド作曲) を思い出した。

♪When it's lamp lightin' time in the valley,
Then in dreams I go back to my home
I can see that old lamp in the window
It will guide me wherever I roam ♪

30 日朝、バンクーバーに無事帰着する。

後日談になるが、お土産にした黒色頁岩 (カンブリア系 ?) とドロマイト質石灰岩を、“これには何も含まれていませんが”と申し添えて今村外治先生に差し上げた。大変に喜ばれた。ところが数日後の夜に電話を貰った。学生実験の時間に実体顕微鏡で検鏡させたら worm 状の化石を学生が発見しましたよ、という電話で赤面した。まったく迂闊であった。差し上げる前に自分で検鏡すべきであったと切齒扼腕。

地質調査とエアークラッシュ

8 月 31 日 (土) Dr.Nestell 一家が 4 人で来訪。クイーンエリザベス公園 (Queen Elizabeth Park) やスタンレイ公園 (Stanley Park) などで遊ぶ。2 泊 3 日の予定で Richland へ帰る。親しくしていた英国出身の大学院生、James Coates が鉱床探査のアルバイト中にブリティッシュ・コロンビアの内陸にて亡くなった。年齢は筆者に近かったと思う。小型水上飛行機のエアークラッシュであり新聞で妻が見つけた。夏の休暇時には地質の専門家が氷河湖をベースにして飛び回る水上飛行機のエアークラッシュでよく亡くなるようである。

9 月 10 日、彼の告別式に出席した。生前、早春のある日、夫妻をわが家の夕食に招待したことがあった。その折、黄色の美しいレンギョウ (Forsythia) の花をつけた小枝一束をもってきてくれたことがあった。博士課程後半の学業中で、本当に気の毒であった。英国人に共通する静謐な人であった。まだ若い Viona 夫人が可哀そうでならなかった。彼女はその後、男の子を養子に迎えて、毎年 12 月のクリスマスカードにその成長ぶりを写真で伝えてくれた。福島原発崩壊の時には、二人でバンクーバーの自分の家に避難してきなさいと手紙をくれた。思いもよらぬ親切であった。

後年、2000 年 3 月に UBC の名誉教授、Ted Danner を研究のことで再び訪ねた時、カナダ地質調査所の Andrew Okulitch と三人、ホテルで夕食をともにした。当時の大学院生について話している時 Westerman はその後どうしているかと聞いたら、James Coates と同様、

南米において小型飛行機で探鉱調査中に飛行機事故で他界したと聞いた。彼もまた、英国の大学を卒業して UBC の大学院に留学していた。地質の専門家 (geologist) はエアークラッシュで時々亡くなる。小型飛行機は危ないものなのだ。

Rouse 教授のこと

1968 年 9 月 14 日、Dr. Rouse 一家からスイスのホンジュール料理の招待を受けていたので返礼に日本料理で Rouse 夫妻と令息をわが家に招待した。Rouse 氏は地層中の花粉分析 (Pollen analysis) が専門で日本の研究者とも論文交換しているという。サバティカル休暇を利用して日本に行きたいという話であった。長崎大学の高橋 清教授の名があがる。高橋清先生なら私もよく知っているという喜んで。九州大学の鳥山隆三教授の下で助手を務めておられたので良く知っていた。ドイツ留学の経験の持ち主である。手紙を書いたら折り返しの返事を受けた。後で Rouse 氏にこの事を告げたら喜んで、それから高橋清先生に手紙してトントン拍子に長崎行きがきまった。令息 Clayton の学校教育上の問題から佐世保の米海軍基地の学校しか英語教育の学校はなかったので佐世保に住むことになった。賢い令息で、私どもが帰国後に佐世保に会いに行ったら見事な日本語を喋り、タクシードライバーにも日本語で指示していた。一家の帰国後 10 数年を経て UBC で粘土学を学び、バンクーバー島に就職し、結婚後まもなく病で逝ってしまう。Rouse 氏自身も急性白血病のため令夫人の Carol を残して泉下の客となってしまった。

石原舜三氏の訪問と B. C. Kamloops サンプルの研究のはじまり

1968 年 9 月 17 日、広島大学の一年先輩で地質調査所の石原舜三氏が B.C.州の調査に来て帰路 UBC の大学院で鉱床学を専攻する Ken Dawson と花崗岩関係のことで意見交換のため、研究室を住友鉱山か三菱鉱山かの一会社名は記憶定かならず一技師と二人で訪問された。流暢な英語で議論をされていた。議論が終わって再び筆者の研究室へきて暫く話を続けた。

筆者がワシントン州のフズリナの顕微鏡写真を、研究室の机と高さがほぼ同じ程度の本棚の上に所狭しと並べていると、これはどの地方のものかと尋ねる。ワシントン州のものという、カナダ政府の奨学資金で来たのにアメリカの研究をやっても良いのか、と不思議そうに質問。筆者はいう。地層はオレゴン州まで続いているのでオレゴンもやっていますよと。石原氏は通商産業省地質調査所時代に米国 Colombia 大学大学院に留学し、その後、地質調査所に復帰、所長、同省工業技術院の院長、北海道大学教授と栄転つづきの人生を歩まれた。

Kamloops のプレパレート作製に学生アルバイト、テクニシャンなどに手伝ってもらい試験研究に供する。これで *Hexaphyllia*, その他の corals, *Pseudoschwagerina* など論文にできると確信する。この地方の地質情報も一層増え、これまで以上に詳しくなる筈である。メインの研究は広島大学で作成した顕微鏡写真装置でないとどうにもならないので岩石資料を広島に持ち帰ってから本格的な研究に取り掛かる以外方法はない。Dr. Ted Danner と話し合う必要がある。

フズリナを求めてカナダへ

9月28日(土)、Stanley Park へ敏子と行く。黄葉はじまる。10月5日、東大の小林貞一名誉教授より Burgess shell のことで手紙を貰う。だがもう Canadian Rocky へ二度と行くことはないので、その旨をお伝えした。10月下旬、岡山大学医学部の医師寺尾氏が UBC の研究のため家族とともに近所に来られ、私どもの滞在期限がきてバンクーバーを離れるまで仲良くお付き合いした。

オレゴン州のフズリナ群集についての室内研究

1968年11月初旬、オレゴン州の Coffee Creek Formation の自分で作成したプレパラートの検鏡を続ける。毎日が興味津々。検鏡を済ませ顕微鏡写真に取り掛かる。これを完了して *Eostaffella* 類の測定等を終了。諸データを得ていよいよ論文の自分の責任分を書き上げることにした。デッドラインは1969年2月末と自分で決めた。

1968年11月22日(金)、Prof. Gower 夫妻、椎川夫妻と私たち二人、地質教室部長の Prof. Mathews 宅に招待される。文部省在外研究で10ヶ月滞在された秋田大学の椎川誠教授のさよならパーティである。

1968年12月8日(日)、Chuck と June を Bellingham に訪ね、Western Washington University の地質教室の実験装置を見聞した。ホテルにて4人で昼食を摂る。夕刻に Vancouver に帰り着く。

1968年12月17日(火)、教室の Christmas Party が Faculty Club で開かれ、敏子とともに招待され出席した。12月20日(金)、Christmas シーズンになると何かと忙しくなる。Ted Danner に招かれる。Dr. Rouse 夫妻も同席した。Rouse さんが盛んに日本のことを質問してきた。いよいよ長崎大学行きが固まったそうである。

Ted Danner からクリスマスシーズンに貰ったポインセチアの葉っぱが枯れ落ちたのを来年冬も真紅の葉っぱに生き返ると思い、大事にアフターケアをしていたが帰国の日が刻々と迫ったある日、寺尾氏夫妻に後を託したことがあった。日本ではその頃見たことのない観葉植物で珍しいものであったが、いま想えば汗顔の至りである。

1968年12月31日(日)、暇を見て纏めた広島県帝釈の”Microfossils of the lowest part of the Taishaku Limestone”の原稿を日本古生物学会へ投稿した。

残り僅かな日々は多忙

1969年1月18日(土)、Chuck と June Ross が来訪。昼食をわが家のすき焼きの日本食でもてなす。1月20日(月)、東大の学園紛争のことが新聞、The Vancouver Sun にて詳しく報道される。困ったものだと思った。1月26日(日)、今日もまた雪。もう雪は嫌になった。スーパーマーケットのセーフウェイへ敏子と食料などの買い出しに出かけるが今年は土を殆ど見ない日々が続く。2月19日(水)、バンクーバー島の鉱山—Western Mines—の見学。滝は氷の柱になっていた。

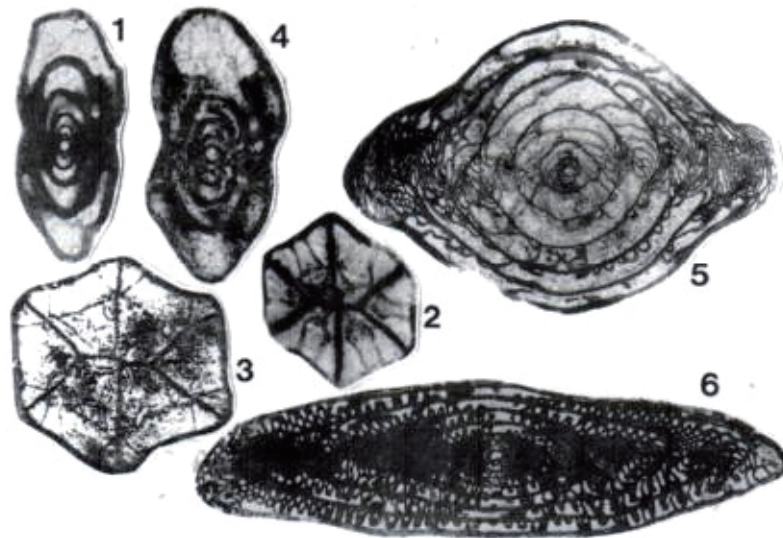
3月3日(水)、今日は日本で雛祭りの日、何となく心が弾む。暗室で Suplee の *Eostaffera*

類の顕微鏡写真を部分的に再度引き伸ばし修正して論文完成。3月6日(木)、残った ADOX 8本を Ted Danner に返す。同時にブリティッシュ・コロムビアとワシントンおよびオレゴンの論文(筆者の責任分の原稿)を Ted Danner に渡して後を彼に託した。

3月9日(日)、ノースバンクーバー(North Vancouver)の吊橋(Suspension Bridge)へ敏子と行く。このころ広島大学の中野光雄助教授からバンクーバーにもう少しいなさい、と度々の手紙が届く。いま帰って来ても大学で研究はできない。学園紛争でどうにもならない、と親切に伝えて来る。こちらは今更どうにもならない。3月21日(金)の夕刻、Ted Danner 教授に招待される。Dean's Restaurant のステーキが美味しいからこの店にしたとのこと。食事後に彼の家で休んで談笑。敏子と筆者に BC ヒスイ(Jade)の装飾品の贈り物をしてくれる。York Av. の Chelsea Manor のわが家に送り届け、12時近くまで話す。明朝、教室でさよならをいう。兼ねて約束の Chilliwack と Kamloops のプレパラートを手持ち鞆に入れて日本へ持ち帰ることにした。岩石資料は船便で SHIPPING することにしてあらかじめ纏めた。

3月22日(土)、June と Chuck の来訪。Pm.1:00~5:00 まで滞在。Kitilano ビーチのヨットクラブに昼食を Chuck が予約していたので招待される。昼食後はわが家で5時まで談笑。お別れをいう。3月26日(水) Mathews 教授、理学部長 Okulitch 教授にお別れの挨拶をした。Mathews 教授から BC Jade 細工の置物を贈られる。PM 6時に寺尾氏一家が我々の宿泊先であるバンクーバー空港ホテルへ送ってくれた。

British Columbia, Washington, Oregon の研究による代表的フズリナ類の顕微鏡写真



- | | |
|---|---|
| 1. <i>Eostaffella oregonensis</i> Sada & Danner X45.8 | 5. <i>Pseudoschwagerina skinneri</i> Sada & Danner X4.7 |
| 2-3. <i>Hexaphyllia</i> sp. 2. X30, 3. X70 | |
| 4. <i>Eostaffella columbiana</i> Sada & Danner X46.2 | 6. <i>Parafusulina laudoni</i> Skinner & Wilde X4.6 |

フズリナを求めてカナダへ

Good-bye Beautiful Vancouver, British Columbia !

1969 年 3 月 27 日 (木)、バンクーバー出発、Seattle へ。Seattle から Boeing 飛行場へ向かう。時間まで待つがリムジーンが来ない。止む無くタクシーを飛ばす。乗り換えのための飛行場で敏子が居合わせた空港関係者にリムジーンがこなかったよ、と話したら待っていてください、確かめる、といって事務室に消えた。出てきてタクシー料金を差し出すので驚いた。そんな心算でいったのではなかったが貰った。事務的なことはなかなかはっきりしているものだ。ソルト・レイク・シティ (Salt Lake City) のホテル Utah に宿泊。夕方、街を散策。これまでに見たこともない美しい夕焼けが今も脳裡に焼きついている。

3 月 28 日、(金)。斑岩銅鉱床の Bingham 鉱山を見学。規模があまりにも大きいので驚いた。会社 Kennecott のこの銅鉱山はアメリカ随一の大きさを誇る斑岩銅鉱床で露天掘り鉱山 (Open pit mine) である。ロート状に掘削され、機械化されていて、少ない従業員の姿は米粒のように小さく見える。現在の採掘品位は CuO 9 %。

午後、当地が発祥の地であるモルモン教の大教会堂を見学して大規模なパイプオルガンの音をきいた。荘厳である。Salt Lake の湖畔で遊ぶ。縁辺は塩分の析出で白っぽくなっている。塩分析出に関連する地域は製塩や化学工場が林立している。二人で指先にて湖水を舐めてみる。可なり塩辛い。Seattle から Montana を経由して Salt Lake City へと飛ぶ時、湖の真上を着陸態勢の低空で飛ぶので湖が良く見えて塩分濃度の変化まで伺い知ることができる。平均濃度は 203 ‰、因みに海水が 35 ‰である。世界で一番塩分濃度が高い湖である。

3 月 29 日 (土)、Salt Lake より、ハイウェイと砂漠に囲まれた Las Vegas で飛行機を乗り換え、Los Angeles へ向かう時、Nevada の上空で、突然、エアーポケットに入り機体が相当に下がる。ヨーロッパ経由を希望していた敏子もこのアクシデントから機嫌を取り戻してくれた。Los Angeles 到着。ホテル Hayward 宿泊。Down Town 見学。

3 月 30 日 (日)、ディズニeland に遊ぶ。広島大学の恩師迎三千寿先生ご夫妻が夜ホテル Hayward へ来てくださる。先生には進級論文から大学院修士課程までお世話になった。先生は California 工科大学へ留学されて、そのまま在米を続けられ市民権をとってアメリカ国籍になってしまわれた。旧制の広島文理科大学は新制の広島大学になったが、新制での海外留学は佐田君が初めてではないかといわれたので、私は 3 番目ですよと答えた。一番目は、一級上の石原舜三さんがアメリカへ、2 番目が同じく一級上の鈴木堯さんがドイツへ、そして佐田です、と申しあげた。手紙は 2013 年のクリスマスシーズンまで続いていたが先生 98 歳を最後に、以後貰うことがなくなった。毎年、写真 3~4 枚いただいて健在をしらせて下さった。先生は日本語を忘れずに達筆であった。先生夫妻は度々広島 of 古巣を訪問され、元の教室員や教え子との食事会にも出席された。ご出身は長崎県であった。

3 月 31 日 (月)、UCLA (カリフォルニア大学) の Loeblich 教授夫妻に会う。朝、夫人の Helen Tappan Loeblich 教授が Hayward へ車で迎えに来てくれた。敏子をホテルに残して大学へ直行する。教室を一巡して設備など見てまわる。昼までに終わりご主人の Alfred R. Loeblich Jr. 教授にホテル Hayward まで送ってもらい、敏子と昼食をご馳走になる。午後 Down Town

を見学。サンフランシスコへ発つ。迎先生ご夫妻のお見送りを受ける。また、広島でお会いしましょうと挨拶した。

4月1日(火)、San Francisco 市内見学。夜、チャイナタウンの中華料理店へ。食後、タクシーに乗る程の距離ではないので歩いていたら見る見る濃霧となる。そのまま濃霧の中を歩いて戻ったが知らない街で心細かった。4月2日(水)、昼間サンフランシスコ見学。PM 9時ハワイへ発つ。UBC で大学院生であった John Child 夫妻が空港に来て、別れを惜しむ。

4月3日(木)、ホノルル市内見学。タクシーでホノルルの溶岩地帯—玄武岩を巡検する。海洋底の薄い地殻を突き破って出てくるマントル・シマ起源の玄武岩は日本などで見慣れた溶岩とは随分異なるものだ。ワイキキで水泳。海水中では寒さを感じなかったが、海から上がってからが寒かった。

同日、東京へ出発、PM5時頃。気象条件が悪く、千葉県館山上空を何回も旋回する。機内放送もなかなか着陸許可が出ないと放送していた。やっとの思いで羽田に着陸。羽田着、4月4日(金)(日付変更線と時差の関係で)、正午頃。羽田から濱井事務長に帰国時間を電報で知らせることになっていたの、電文を打つ。国家公務員はかように雁字搦め。同日、親戚に宿泊。4月7日(月)、AM 7時、広島着。4月8日(火)、大学紛争による正門バリケードをくぐり抜けて広島大学へ出勤。4月10日(木)、教授会で帰国の挨拶をする。4月23日(水)、今村外治先生のご自宅をお尋ねして先生と再会する。

Leitz 社製のマクロ顕微鏡写真装置と Ted Danner 教授を迎える

大学紛争で大事な時間が過ぎてしまった。空しいばかりだった。それでもやがて学生の指導と研究が始められるようになった。Ted Danner との約束の仕事を進めて行く。およそ2年間で資料づくり、自作の顕微鏡撮影装置での撮影、測定、生物学的諸要素の検討などなど、多忙な日々を送る。その間 Leitz 社製のマクロ顕微鏡写真装置(視野が中程度のもの、Carl Zeiss のレンズを装備している)を購入することができた。学園紛争が一応おさまり、旧文部省が一年分の予算をつけてくれたので、会計年度ぎりぎり猪原商会からドイツへ発注することができた。価格は忘れてしまったが教室予算の大部分を短期間に消費することになった。多井義郎先生には大変感謝している。猪原商会の人曰く、広島大学広しといえどもこの装置は医学部と先生のところにしか入れておりませんと。本当に良かったと思った。*Fusulinella* や *Fusulina* 級のものが容易に撮れるようになった。マクロレンズの解像度はよく、絞りやシャッターもあわせれば自動でできた。

当方の準備はできたので Ted Danner 教授に広島大学で日本学術振興会(文部省の外局)の外国人研究者招聘で仕事を仕上げないかと手紙で打診した。2ヶ月間の滞在費と往復航空運賃は保障されると付け加え、生活するには充分過ぎる額であるとも付け加えた。地質学部長 Mathews 教授に相談したら許可をもらったという返事があった。手続きをとり審査を受け、二人の仕事は認められた。本当に良かったと思う。同時に若い助教授の筆者の希望を多井義郎教授がこころよく聞いて下さったと思う。今も感謝に耐えない。

フズリナを求めてカナダへ

いよいよ Ted Danner 教授がやってくるので 1972 年 9 月 1 日（金）、羽田まで夕刻に迎に
でた。彼はおよそ 3 年半前と変わらず再会を喜びあった。9 月 2 日（土）午前中、二人で東京
タワーなどを訪れ。夜、広島着。9 月 4 日（月）、仕事の打ち合わせを Ted とする。野外巡
検に 4 分の 1 を当て、後の 4 分の 3 を論文の完成に当てる方針とした。

Ted Danner 教授と二人で今堀学部長に挨拶をする。巡検は吉備高原地方（阿哲石灰岩、帝
釈石灰岩）、秋吉石灰岩、和歌山県（湯浅、白浜、新宮、串本の学生巡検に参加）、愛媛大学
（日本古生物学会例会）と岡山大学（日本地質学会西日本支部会）なども予定に入れた。日
本古生物学会例会では特別講演を依頼された。これ以外の日は論文の完成に集中してもらっ
た。結果は計画通りに、3 つの論文の完成を成し遂げた。後の数編は手紙のやりとりで完成
させ得る。安堵した。秋吉台の巡検では自然史博物館長太田正道博士に大変お世話になった。

学生のために講演を依頼された。通訳は佐田にとの学部長の指名。アメリカの地質のトッ
ピックスを略 1 時間半かけて話す。好評であった。後で判ったが偽学生も入りこんでいた。
大勢の学生の中に紛れ込み、多井義郎教授夫人と心配性の妻敏子が偽学生になっていたとの
こと。

Ted Danner 教授の帰国前に今堀学部長が本通りのアンデルセンで昼食会を開いてくださ
った。招待された出席者は Ted Danner 教授、式部評議員、荒谷評議員、多井教授、筆者。
最後に飯島学長に学長室に呼ばれて広島大学の記念品を贈られる。教室ではさよならパーテ
ィを八丁堀のレストランで催した。2 ヶ月が瞬く間に過ぎてしまい、10 月 31 日、早朝の広
島空港に敏子と二人で見送った。短期間の滞在であったので本当にお疲れさまでしたと伝え
た。

研究はその後も手紙で打ち合わせながら全部で 9 篇の印刷論文となった。前にも触れたが
2000 年 3 月筆者の研究テーマは“土地利用問題”となりバンクーバーの地質調査に行く。当
地で 2 度目の、久闊を叙することができた。10 日間の滞在であった。

むすびに

1 年 6 ヶ月の滞在中にブリティッシュ・コロンビアとワシントン、アメリカ合州国の西部の
石炭系からペルム系のフズリナを研究し、そのうちの B.C.～ワシントン州のものとオレゴン
州の群集について記載して論文にすることができた。残りのものは大型フズリナのため広島
大学へ持ち帰り一気呵成に完成させることに成り、coral に関しては杵山教授の協力も得て、
杵山、佐田、Danner で論文を上梓させることができた。さらに Ted Danner 名誉教授は B.C.
南西部地方の地質・古生物を纏めて一冊の分厚い論文として、共著（1999）で上梓された。

星霜は移り、国内外の多くの研究者が泉下の客となってしまわれた。Ted Danner 教授も
2012 年 5 月 26 日、逝去された。88 歳であった。先生は生涯独身を貫かれた。新聞の The
Vancouver Sun や The mineralogical Record、Biographical Archive 等がかなりのスペース
を当てて彼の死を悼んだ。惜しみてもあまりある先生であった。また 1969 年 3 月の筆者の帰

国以来 2014 年まで、実に 45 年間、Danner 先生は年 4 回の季刊雑誌“British Columbia”を筆者のために贈り続けられた。先生のご厚誼はこうして先生の逝去後も 2014 まで続いた。また、カナダ、アメリカの大学関係者と研究所の方々にも深甚なる感謝の意を表すとともに、泉下の客になられた多くの方々に哀悼の誠を捧げる。恩師、故今村外治先生・故多井義郎先生（広大）、故鳥山隆三先生・故勘米良亀齡先生（九大）の御魂にも深い感謝の念を捧げる。広島文化学園大学大学院研究科長の今田寛典教授にはご高配を賜った。お礼を申し上げる。

参考文献

- Danner, W. R. et al., 1999, Geology and Paleontology of the Carboniferous and Permian of the Exotic Terranes of Southwestern British Columbia. XIV International Congress on the Carboniferous-Permian, 1999
- Danner, W. R. et al., 2000, Paleontology of the Cache Creek and Quesnellia terranes, southwestern British Columbia, *Geological Association of Canada*.
- 佐田公好, 1972, British Columbia, Washington, Oregon 州の Chesterian と Morrowan 紡錘虫化石動物群について, 広大教養部紀要, III, 6, 11-17.
- Sada, K. and Danner, W. R. 1973, Early Permian *Parafusulina* and *Pseudofusulinella* from the Chilliwack Group, southwestern British Columbia, Canada. *Trans. Proc. Palaeont. Soc. Japan, N.S.*, 90, 72-80.
- Sada, K. and Danner, W. R., 1973, Late Lower Carboniferous *Eostaffella* and *Hexaphyllia* from central Oregon, U.S.A. *Trans. Proc. Palaeont. Soc. Japan, N. S.*, 151-160.
- Sada, K. and Danner, W. R., 1974, Early and middle Pennsylvanian fusulinids from southern British Columbia, Canada and northwestern Washington, U.S.A. *Trans. Proc. Palaeont. Soc. Japan, N. S.*, 93, 249-265.
- Sada, K. and Danner, W. R., 1976: *Psedoschwagerina* from Harper Ranch area near Kamloops, British Columbia, Canada. *Com. Vol. Found. Fac. Integrated Arts. and Sci. Hiroshima Univ.*, 213-228.
- Sada, K. and Skinner, J. W., 1977, *Paradoxiella* from Japan. *Jour. Paleont.* 51, 2, 421.
- Sada, K. and Danner, W. R. 1992, *Pseudoschwagerina skinneri*, n. sp. from near Kamloops in British Columbia, Canada. *Trans. Proc. Palaeont. Soc. Japan, N. S.* 167, 1259-1263.
- Sada, K. and Danner, W. R., 1994, A large species of *Verbeekina*, *V. sp. A*, from Taishaku Limestone in Hiroshima Prefecture, West Japan. *Trans. Proc. Palaeont. Soc. Japan, N.S.* 173, 401-404.
- Sugiyama, T., Sada, K. and Danner, W. R., 1999, Carboniferous and Permian corals from Kamloops, British Columbia. *Guidebook for pre-conference Field Trip, No.9: XIV International Congress on the Carboniferous-Permian: Calgary, Alberta, Aug. 12-16.*
- 佐田公好, 2001, Vancouver と Victoria における土地利用—庭園・公園の事例. 中地調、広島 5.

フズリナを求めてカナダへ



Prof. Wilbert R. Danne



カナダのメイプル



Dr. Betty Skipp



Prof. Charles & June Ross



Dr. John W. Skinner



Dr. Raymond C. Douglass と筆者



Dr. Donald A. Myers と夫人



左より Drs. Mc Guban, Banber, Nassichuk ら



Dr. Banber と夫人



Salt Lake の Bingham 銅山



Orcas 島のジャンボ土筆



Prof. Rouse 一家とわが家で



アサバスカ氷河 (Athabasca Glacier)



谷氷河は 1946 年にこの位置まであったと記されている



谷氷河の側堆石 (Lateral moraine)



アサバスカ氷河の上方に見える圏谷 (Kar)



上は Mt. Cascade; 下は Mt. Randle



上は氷河擦痕; 下は広大佐田研究室での Danner 教授

